

---

# 強盗

さやはち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

強盗

### 【Nコード】

N61050

### 【作者名】

さやはち

### 【あらすじ】

コンビニに入った強盗。  
そこに弁当を課に来る青年。  
たすけてくれるの?!

(前書き)

完全に思い付きです。

あんまりうまくいもんでもないです。

……ごめんなさい。

バイトを始めて半年。  
ようやく慣れてきた私は今、  
レジで慣れないものを差し出されています。  
包丁。

商品ではありません。

コンビニに包丁は置いてません。

もちろん、

強盗です。

「金出せ」

「は、はい？」

「かねだせつつつてんだよ！みればわかるだろ！！」  
茶髪でマスクにサングラスって変装は、バカっぽいけど、すごまれ  
るとやっぱり怖い。

わかってるよう。

わかってるけど…

渡せるわけないじゃん

もう一人のバイトは奥で商品棚に並べてるし、

こんな夜中じゃ他の客もいないし、

どうしょ

「きこえてんのか！はやくしろ！」

「は、はいいい！！！」

しょうがないよね。

命には代えられないもん……

でもこれでクビかなあ……

私がそう思ったそのとき、レジのカウンターにおかれたのは期間限  
定弁当。

「おねがいしまーす」

顔を上げると、大学生風な青年が自分財布を見ていた。強盗もさすがに驚いたようだ。当然私も驚いた。

「あ、あの……」

「あ、暖めもお願いします」

そういつてあげた顔には見覚えがあった。よく弁当を買いに来る人だ。

いつもてきとうな服で来ていて、家が近いんだろうけど、

弁当ばかりじゃ体に悪いのになぁと思ったりもしたけど、今はそれどころじゃない。

「てめえもみればわかるだろうが！」

そう、みればわかるでしょう？

このひと……

「強盗でしょ。わかってますよ」

わかってるなら空気読んでよ

そんな私の思いも知らずに、

彼は始めて強盗のほうを向いて、

「でもよく考えてください。僕が買い物したほうがあなたには得なんですよ？」

「ああ？」

「僕が買い物すればそのお金はレジにはいつて、あなたがとるお金が増えるんですよ？」

「ああ……ああ？」

こらこら、悩むな。

あんたどうせ札しか持っていかないでしょうが。

この人が小銭入れても意味ないって。

そんなんでスキ作ってたら捕まるよ

いや、私はそのほうがいいんだけどさあ……

「んははした金はどうでもいいんだよ!! すっこんでるよ! この女殺されてえのか!」

だからって私に包丁突きつけないでー

「それは困ります」

え? それって…

「お弁当が買えなくなる」

そっちかよ!

「てめえ、なめてんのか!」

強盗も怒って気がそれた一瞬で彼の手が動いた。

強盗の方にでなく、私の方に。

「なっ!」

彼がつかんだのは包丁の刃。

それも思いつきり。

強盗が怯んでるすきにもう片方の手で強盗を殴り付けて包丁を奪つ。

そして、殴った手で包丁を持ち直し強盗と対峙する。

すごい。

「どうします?」

「くそ!」すべて一瞬の出来事で日常とはかけはなれていた。

逃げていく強盗をただただ呆然と見送った私にかけられた言葉は、

あまりに日常的すぎて間が抜けて聞こえた。

「あの、お弁当あなたためてください」

固辞する彼を無理やりひっぱって、バックヤードで手の手当てをする。

手のひらに深々と刺さっていたらしく、見るだけで痛々しい。

「うわー痛そうー」

「いいですって。帰って自分でしますから」

「だめです。片手じゃできないでしょ」

消毒液を傷口にかけると、彼は顔をゆがめた。

まあ………無茶した罰として受け取ってもらおう。

ガーゼを当てて包帯を巻く。

彼の顔は………またゆがんでいる。

うん。さすがに

「ごめんなさい……うまくなくて……」

「いや……まあ……がまんします。これぐらい」

痛くないとはいってくれないのね。

「あと………ありがとうございました。たすけてくれて」

「ああ……いえ」

軽く視線をそらすのに、期待をよせてきいてみる。

「なんでたすけてくれたんですか？」

「なんでって……別に普通でしょ」

「でも……なにもこんな無茶しなくてもいいんじゃないですか？普通に警察呼ぶとか」

「一応あせってそんなに頭回らなくて」

「そんなに必死になって助けてくれたんですか？」

ああ、今私上目遣いなんかかしてる……

包帯巻きかけの手なんか握っちゃって……

でも彼はため息をついて、

「まあ……お弁当買えなくなったら困るんで」

やっぱそっちかよ。

もしかしたらこれが本心なのかも。

ロマンチックな展開を期待した私が馬鹿でした。

いいですよ、おとなしく包帯巻いてますよ。

「……だいたいお弁当なんか他でもいくらでも買える………」

つぶやいたら、意外な言葉が降ってきた。

「あなたがいるところで買えなくなるのが困るんですよ」

「え？」

見上げると彼は視線をはずしたまま、顔を赤くしていた。

なんだ、ロマンチックになっただじゃん。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6105o/>

---

強盗

2010年10月31日06時12分発行